57th GALAXY AWARDS ギャラクシー賞 贈賞式

放送コンテンツの作り手を表彰して半世紀以上、贈賞式の完成度と華やかさでも国内トップクラスのギャラクシー賞だが、今回はスケジュール、規模、形式……すべてで異なる様相を見せた。

例年の式典は6月初め頃で、事前に公表された入賞作品から、大賞・優秀賞がその場で発表される。だが今回は、6月1日に入賞作品がリリースされ、7月2日に大賞・優秀賞がネット動画であらかじめ発表された。2カ月遅れとなった式も、7月に再拡大した新型コロナウイルス感染者数が直前にさらに急増したことから慎重な対策が求められ、直前まで多くの変更を余儀なくされた。

だが言うまでもなく、表彰された作品、制作者、個人の栄誉と功績の重みは、例年と少しも変わらない。そんな第57回ギャラクシー賞贈賞式をリポートする。

8月3日（月曜）、場所は東京・渋谷にあるセルリアンタワー東急ホテル。3密を避けるために、会場の形も変わっていた。贈賞式は例年、映画館のように客席がすべてステージのほうを向く形で行われ、式の終了後は別の部屋で立食の懇親会がある。式では700名近くの参加者が舞台を見つめ、拍手を贈り、懇親会は立錐の余地もない盛況ぶりを見せる。だが今回は贈賞式と懇親会の会場が一つとなり、丸テーブルに椅子が配されていた。テーブル同士も椅子の間も広くとられ、各テーブルには消毒液、各席にフェイスシールドも用意されていた。また、独自の感染防止対策も施された。

出席者は受賞者と選奨委員のみで特別ゲストもなし。スタッフも最小人数に抑えられ、学生アルバイトの姿もなかった。会場に出入りしたのは取材メディアを合わせても150名ほどだ。式後には受賞者と選奨委員の懇談の時間として「茶話会」が予定されていたが、当日、中止の判断が下された。

●

午後4時開幕。トップを飾ったのは、DJパーソナリティ賞。**爆笑問題**の二人が客席からステージに上がった。マイクを向けられた太田光さんが「ひとつ悲しいお知らせがありまして、伯山ティービィーが受賞取り消しとなり……」とボケをかますと、すかさず田中裕二さんが「いや、受賞されてます」とツッコむ。そのノリのなかで「われわれは中学生ぐらいの時から40数年ラジオを聴いていた。ラジオをやるほうになってからも30年。ラジコができて、いろいろ取り上げたから、この賞をいただけたのかも」「ラジオをやりたくてこの世界に来たから本当に嬉しい」などと喜びを表した。

続いては、映像コンテンツの新境地を開拓した取り組みに贈られるフロンティア賞。受賞したのは**神田伯山ティービィー**だ。浅草の寄席から駆けつけた講談師の神田伯山さんと、妻でありプロデューサーであり冬夏株式会社の代表取締役でもある古舘理沙さんが登壇した。

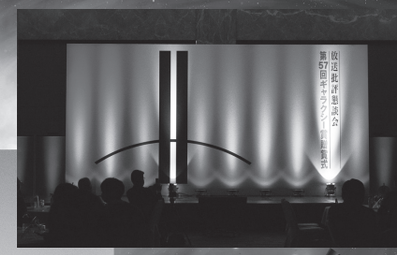
神田さんは「この賞をいただいてから妻の機嫌が非常にいい。私は表方の人間で、裏方は妻がずっとやってくれていたのですが、どうしても表の人間ばかりが目立ってしまう。でも、彼女の頑張りがなければ間違いなく僕はこの状況にはなってないという確信がありますから、自分の賞よりも妻の賞のほうが嬉しい」とパートナーへの感謝を語り、「今後は太田（光・光代）夫妻と（立川）志らく夫妻を見習って頑張っていこうかな。グッとラック！」と締めた。

テレビ部門の個人賞は、女優の**伊藤沙莉**さん。「賞をいただくきっかけになった作品の多くに、思い出がたくさんあります。特に『映像研には手を出すな！』はアニメの主人公の声という未知の世界でしたが、すごく楽しんでできたので本当に嬉しい。この場に立てていることも、今のお仕事も、すべていろいろな人に支えられているという当たり前のことを忘れずに、好きなお芝居を続けていけたらいいなと思います。これからも、まだ見せ切れていない、いろいろな伊藤沙莉をお見せしたい」と語った。赤と黒のワンピースに身を包み、赤のマニキュアをした手で、赤のトロフィー（バードマン）を掲げて嬉しそうにほほえんだ。

●

4時20分過ぎ、部門ごとの表彰に移った。

例年は入賞作品だけが事前に発表され、当日、入賞者全員（部門ごと）が壇上に並んだところで「優秀賞」、そして「大賞」が発表される。大賞・優秀賞には至らなかった入賞作品は「選



入場ゲートには体温検知サーモグラフィー、消毒液を設置。会場や受付にはソーシャル・ディスタンシングの足跡マーク。取材も最小限に

司会を務めた赤平大さんと上野愛奈さん

1400人収容のスペースに、120席程度の円卓が点在し、卓上には消毒液とフェイスシールドが用意された会場

奨」となるわけだが、今回の入賞者は大賞・優秀賞・選奨のどれになったかがわかったうえでの参加なので、いつもほどの緊張はなかった。

まずCM部門。選奨10本のうち出席できた6本の制作者が、続いて優秀賞3本の制作者が、CM部門の服部千恵子委員長から贈賞された。

大賞は「I HOPE.」（カネボウ化粧品、電通、ティー・ワイ・オーMONSTER）。登壇した電通の小松洋一さんは、「激変の難しい時代、化粧もアップデートが必要だと考えました。I HOPEプロジェクトはまだ産声を上げたばかりですが、希望というテーマを掲げた重責と、自ら設定した高いハードルを、これからも皆で越えていきたいと思います」と語った。

続いてラジオ部門。まずは選奨の4本に、続いて優秀賞3本に、ラジオ部門の五井千鶴子委員長が贈賞した。

大賞となった「J-WAVE SELECTION GENERATION TO GENERATION ～STORIES OF OKINAWA～」で金色のトロフィーを手にしたJ-WAVEの高知尾綾子さんは、「賞をいただけたのは、（戦後沖縄の放送と共に歩んだ）川平朝清さんと、（息子の）ジョン・カビラさんにご出演いただけたから」と、受賞者席の二人を紹介。「とてもシンプルな番組ですが、朝清さんのメッセージには本当に心に刺さるものがあります。ぜひ、それぞれのメッセージを受け取っていただければ」と述べた。

式の後で聞いた二人の声を短く紹介しよう。

「慰霊の日というシンボリックな日の放送で、昭和・平成・令和と放送に携わってきた父の思いに触れ、普遍的なテーマを聞けて非常に貴重でした。私は東京の中学に編入し、教師から『沖縄にもテレビがあるのか』と聞かれましたが、少しでも誤解と偏見を打ち破るような仕事がしたいと思います」（ジョン・カビラさん）

「（終戦まで台湾で育ち、戦後沖縄に行ったため）統治する立場から統治される立場に移った経験が基盤になりました。今、ちょうどアメリカの大学に行っていた孫娘が帰ってきたところで、ジェネレーションを繋ぐ機会を与えられたことに感謝しています」（川平朝清さん）

報道活動部門は、選奨3本のうち出席できた1本の代表と、優秀賞の2本の代表が、報道活動部門の丹羽美之委員長から贈賞された。

大賞は**「中海再生への歩み」**。制作者は中海テレビ放送（鳥取県米子市のケーブルテレビ局）だが、残念ながら欠席となった。

●

志賀信夫賞は**樋泉実**さん（北海道テレビ放送相談役）。放送批評懇談会の音好宏理事長から賞状とトロフィーを受け取り、「30年近くメディアの変化と格闘しながらきましたが、ずっと思っていたことが二つあります。一つは、風が吹いた時に前に行くために、常にヨットの帆を張っておくこと。もう一つは、地域の未来戦略に貢献すること。デジタル化と向き合っていくのは、地域をもう一回見直すことでもありました。まさに地域はコンテンツの宝だと改めて思いますが、その意味でも地域メディアにはまだまだ役割があり、ますます重要で、地域社会はそれを待っていると思います」と語った。

一般視聴者が選ぶマイベストTV賞は**ドラマ24「きのう何食べた?」**。テレビ東京の阿部真士さんには、式後にコメントをもらった。

「直接、視聴者に選んでいただいたことを、本当に嬉しく思います。このドラマはゲイのカップルの話ですが、淡々とした日常をしっかり送っている。同性カップルでも異性カップルでも、人としての営みは基本的に変わらない。それを料理を通して描きたいというメッセージが視聴者にちゃんと伝わったなと思います」

特別賞は**「ゲゲゲの鬼太郎」テレビアニメ化50周年記念・第6期**。テレビ部門の出田幸彦委員長から贈賞されたフジテレビジョンの狩野雄太さんは、式後に「6回もアニメ化されたのは、原作の持つパワーが非常に強く、魅力的なキャラクターがいて飽きない作りになっているから。『今回はこう作ります』とお話ししたとき、驚きながらも面白がってくださった。制作チームに好きに取り組ませてくれる原作はなかなかないと思います。回によってカラーが違う鬼太郎が出てくるのも面白いところです」と語った。

●

最後はテレビ部門。大賞はテレビ信州の**チャンネル4「カネのない宇宙人　閉鎖危機に揺れる野辺山観測所」**。ディレクターの高柳峻さんの「地方局として大きな励みとなりました。野

CM部門

大賞：カネボウ化粧品 KANEBO「I HOPE.」の表彰を受ける電通第5CRP局GCD統括ディレクターの小松洋一さん

優秀賞：東海テレビ公共キャンペーン「見えない障害と生きる。」東海テレビ放送プロデューサーの桑山知之さん

優秀賞：コカ・コーラ自動販売機「笑顔を、ここから。」電通CMプランナー／コピーライターの諸橋秀明さん

優秀賞：三井住友カード「Thinking Man篇」三井住友カード執行役員の佐々木丈也さん。「Thinking Man」には2年連続で優秀賞が贈られた

ラジオ部門

大賞：「J-WAVE SELECTION GENERATION TO GENERATION～STORIES OF OKINAWA～」でトロフィーを手にするJ-WAVEコンテンツマーケティング局コンテンツプロデュース部プロデューサーの高知尾綾子さん

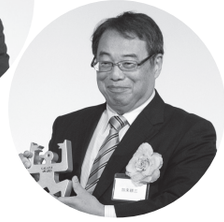
DJパーソナリティ賞：爆笑問題
各地のパーソナリティとの交流など、ラジオに新しい広がりを生みだして評価を受けた

贈賞式後の記念撮影

優秀賞：「佐藤旬子と板東道生のとなりのラジオ」四国放送東京支社長の小西誠一郎さん

受賞番組で、沖縄の戦後史、放送史を親子で語り合った川平朝清さんとジョン・カビラさん

優秀賞：「あなたと見た風景～目の見えない初江さんの春夏秋冬～」青森放送ラジオ制作部長の山本鷹賀春さん



優秀賞：「加来耕三が柳川で大河ドラマをつくってみた　超拡大！放送尺22倍SP」出演者で歴史家の加来耕三さん

志賀信夫賞

音好宏理事長から志賀信夫賞のトロフィーと賞状を贈られた樋泉実さん

マイベストTV賞

マイベストTV賞に輝いた「きのう何食べた?」でチーフプロデューサーを務めたテレビ東京制作局ドラマ室の阿部真士さん

テレビ部門

優秀賞：NHKスペシャル「日本人と天皇」制作統括の日本放送協会チーフ・プロデューサーの山本大典さん

優秀賞：「ウルトラハイパーハードボイルドグルメリポート」企画から演出までを一人で担ったテレビ東京の上出遼平さん

優秀賞：「俺の話は長い」演出を務めた日テレアックスオンジェネラルディレクターの中島悟さん

特別賞：「ゲゲゲの鬼太郎」テレビアニメ化50周年記念・第6期が受賞。トロフィーを掲げるフジテレビジョン編成制作局編成センター編成部の狩野雄太さん

大賞：チャンネル4「カネのない宇宙人　閉鎖危機に揺れる野辺山観測所」テレビ信州報道制作局制作部ディレクターの高柳峻さん。爆笑問題の番組のAD経験があり、贈賞式は嬉しい再会の場にもなった

個人賞：伊藤沙莉さん
主役も脇役もこなす力量が認められての受賞となった

フロンティア賞：神田伯山ティービィー
夫婦で登壇した神田伯山さん、古舘理沙さん

報道活動部門

優秀賞：「キャンペーン報道“用水路事故をなくす”」制作統括として指揮したNHK富山放送局の小田島拓也さん

優秀賞：「ヤジと民主主義～警察が排除するもの～」。ドキュメンタリー作品でもディレクターを務めた北海道放送の長沢祐さん

辺山宇宙電波観測所を1年取材しましたが、シンボルの45メートル電波望遠鏡は、光の届かない、つまり目には見えない電波を、鋭敏な感性で拾って観測しています。これは僕らの社会にも似ていると思うのです。大きな壁や歪みのなかで、なかなか聞こえてこない言葉や、すぐには顕在化されない小さなシグナルを、この電波望遠鏡のように鋭敏な感度を持って、これからも拾い続けていきたいと思います」という、メディアの矜持を語るコメントが最後を飾った。

●

開始からクライマックスまで約1時間。あっという間だった。長時間の会席を避けるため随所で時間短縮が図られていたからだ。例えば、いつもはすべての入賞作品に短い贈賞理由が述べられるが、選奨は受賞者の紹介にとどめられた。また、スクリーンで流される作品も、今回は大賞に限られた。各部門の委員長による講評も、優秀賞受賞者のコメントも見送られた。残念な気がしなかったわけではない。だが、コロナ禍による未曾有の事態のなかで、それでも作品や作り手はできる限り相応しい形で顕彰されるべきだという熱意で準備されてきたことが十分に伝わってきた。

なお、思いがけないメリットがいくつかあった。表彰では、受賞者が一人ずつ登壇した。もちろん壇上の密を避けるためだが、写真撮影の時間がしっかりとれたため、緊張や照れとともに、晴れがましさと嬉しさを噛み締めた笑顔がスクリーンに大写しになり、見ている側も一人ひとりと喜びをゆっくり共有できたのだ。

例年と違う会場形式だったことで、良かった点もある。まず、受賞者と選奨委員が同じテーブルにつき、選び抜かれた作品を共に祝うことができた。また、爆笑問題や神田伯山さんの姿が最後まで会場にあった。例年の贈賞式の演出スタイルでは、芸能人は降壇後はすぐさま引き揚げることがほとんどで、表彰される作品や制作者の姿につきあうことは少なかったが、今年はすべての受賞者が一体となってギャラクシー賞の意義を感じている空気が伝わってきた。

放送批評懇談会の公式ユーチューブチャンネルに式の模様がすべてアップされたのも、意義があったと言えるだろう。 G

文／飯田みか　写真／岩尾完治、官野 貴、花井健朗、園 了佑